

句集

母衣

ほろ

大森慶子

新絹へ

ゾーリンゲンの

刃が進む

新絹は、その年の繭からとった生糸で織った絹のことで日本的なものであるが、そこへ登場したのが、日本の裁ち鉄でなくドイツで造られた鋭利なゾーリンゲンの刃であったのがおもしろい。一時、代前の洋裁の様子でなく、現代の家庭にあった新しい感覚が窺える。

能村研三

「序」林翔

「跋」能村研三

若者は腿で粗朶折る大焚火

新絹へゾーリンゲンの刃が進む

九十歳生き抜きたりし裸かな

新米で満たす米櫃あす入院

点
滴
の
冬
陽
に
光
り
恢
復
期

目
瞑
り
て
予
後
の
甘
え
の
日
向
ぼ
こ

焼松茸歯応へといふ味もあり

抜き衿のつぼみ混み合ふ菊人形

腰掛けてみる正月の空きベッド

外套を脱ぐ夫倒れぬのが不思議

首振るがちちの言葉や籐寝椅子

釘打ち過ぎし台風の肩透かし

魚籠に野の花を
活けをりははの秋

雪吊の雪知らぬ
まま解かれけり

さざえ焼くむらさきの香と潮の香と

亀鳴くや夫留守の夜は耳聴き

炎
昼の動悸はげしく訃を知らず

朝
寝せりロンドンの夫寝る頃か

鰭
付
け
し
人
が
海
よ
り
夏
岬

陶
器
市
夕
焼
い
く
つ
も
並
べ
売
る

最後尾の雁が追ひ付き棹となる

数へ日の脹らんでゐる客蒲団

土踏ま^ず真白く海女の潜りけり

どこまでも雪どこまでも最上川

母の日や
妣の琴爪にて
弾かむ

富士映さぬ
早苗の丈となり
にけり

はは逝きて日の丸のなき建国日

若松や嬰のグラフは右上がり

醬油造る香の淀みぬる薄暑かな

故郷は本所石原震災忌

秋灯下江戸地図にあるわが故郷

呉服商座し繚乱の冬座敷

父が被るむかし贈りし冬帽子

搗き立ての餅の楕円になりたがる

洗心のしばし佇む大瀑布

稲光はつと子の場所夫の場所

角材に朱印くつきり初荷着く

車ごと嫁いで行きぬ秋の暮

車座となりたきこともあらむ雛

太平洋浮輪の中の一人かな

バスを待つので虫一メートル進む

実南天祝詞受けある間も眠り

まつさらな未来ありけり冬木の芽

寒椿湯気上ぐるものより売れて

空
飛
ん
で
飛
ん
で
成
田
の
初
明
り

忘
れ
雪
茶
室
に
入
る
銅
鑪
を
待
つ

職退きし夫と伊東の春渚

高枝よりさくらさくらと散りにけり

句集 母衣（ほろ）

平成十七年九月一日 発行

著 者 大森慶子

発行者 大山基利

発行所 株式会社 文學の森

PDF 俳誌のsalon